

平成31年1月7日
京都市総合企画局

平成30年度政策評価委員会（平成30年12月10日開催）摘録

事務局 仲筋課長	ただ今から、平成30年度京都市政策評価委員会を開催いたします。本委員会につきましては、これまでどおり公開としておりますので、御了承願います。委員の皆様方には、大変お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。私、政策企画調整第二課長の仲筋でございます。どうぞよろしくお願いいたします。 それでは、開催に当たりまして、結城政策企画調整部長から、御挨拶を申し上げます。
事務局 結城部長	政策企画調整部長を務めております結城でございます。窪田委員長をはじめ委員の皆様方には、それぞれ御多忙の中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。 さて、本市では、全国的にも早い時期から政策評価制度を採り入れ、これまで15年以上の制度運用の中、市政運営に欠かせないものとして定着しております。 この間、窪田委員長、風間副委員長をはじめ、委員の皆様からの貴重な御意見をいただき、本政策評価委員会において制度の不断の点検、改善の役割をしっかりと果たしていただいていることに、改めてお礼申し上げます。評価制度の改善・向上を積み重ねてきたことにより、全国的に見ても完成度の高い制度になっているとの評価もいただいております。 一方で、課題もございまして、一つ目は今年度の市民生活実感調査の有効回答数について、大台であります1,000件を割るということになり、喫緊の課題と考えております。また二つ目は事務の効率化でございます。働き方改革が叫ばれておりますが、そうした中で一層の事務の効率化に取り組んでいかなければならないと考えております。 これまでもから御議論いただいているところでございますが、評価制度の効果的な政策への活用、あるいは市民の皆様への分かりやすい発信、これらに加えて、効率化という観点につきましてもお知恵を拝借できればと考えております。簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
事務局 仲筋課長	それでは以後の議事につきましては窪田委員長に進行いただきます。委員長よろしくお願いいたします。

窪田委員長	承知いたしました。では改めまして、皆さんおはようございます。今年度の政策評価委員会を進めてまいりたいと思います。気が付きますと、現在の私達のこの委員会の任期も今回までということでございますので、最後に皆さんの御感想ですとか、今後の評価制度、評価委員会への御意見等をいただければと思います。それでは、早速進めていきたいと思います。 本日の議事の一つ目といたしまして、平成30年度政策評価の流れについて御説明いただきたいと思います。よろしく御願いたします。
事務局 仲筋課長	－事務局より議題1「平成30年度政策評価の流れ」（資料1）について説明－
窪田委員長	この議題1につきまして、ここで御質問等がありましたら、いかがでしょうか。 (質問なし)
窪田委員長	ありがとうございます。引き続きまして、平成30年度の政策評価結果及び政策評価の改善状況の御説明をお願いいたします。
事務局 仲筋課長	－事務局より議題2「平成30年度の政策評価結果及び政策評価の改善状況」（資料2，3）について説明－
窪田委員長	今御説明いただいたものにつきまして、御意見、御質問等お伺いできたらと思います。
中村委員	市民公募委員の中村でございます。3点ばかりお伺いしたい事があります。 まず1点目、駐輪場の整備について、こちらは市の補助を受けて整備されたものの件数でしょうか。民間が補助なしで単独でやっているものでしょうか。 続きまして、児童館来館の登録者数について、これまで3年生までの引き受けでしたが、小学校6年生まで広げたということで、昨年度から多少人数が増えたのではという感想です。もちろん5～6年生はあまり登録されていないと思いますが、また、目標値に対して下がったので残念ですが、おそらく児童数の減少というものも、来館者数の減少の大きな割合を占めているかと思います。児童数が減ったことによる来館者数の減少というも

	のを加味すると、評価としては、実際はあまり下がっていかないのではないのでしょうか。利用者数は増えている気がします。意見として、そういう取り方もあるのではと思いました。 3点目になります。これは教えて欲しい点ですが、河川の改修について、例えば、鴨川であれば京都市単独では出来ないのではないのでしょうか。府やもっと大きな行政体が管理することになり、単に市として出来ることが限られてくると思います。ここでいう改修されたというのは、京都市として単独で責任をもってやっていることをいうのでしょうか。それとも先ほども申し上げましたが、鴨川でどこか破損した所があった場合、国や府と共同事業で実施したということであれば、政策評価とは毛色が違うのかなと思ひまして、そちらも質問としてお伺いしたいと思ひます。
事務局	駐車場整備につきましては、京都市が駅周辺で整備している所に加え、補助金で民間の業者が整備している駐輪場もございます。そちらもカウントしております。
窪田委員長	参考までに、今のカテゴリー以外の自転車の駐輪場みたいなのはあるのでしょうか。
事務局	駐輪場で民間独自というのは少ないですが、西大路駅等であれば民間が設置している駐輪場がございます。
窪田委員長	2点目についてお願いします。
事務局 仲筋課長	2点目は、確かに児童数総体の減少もあるのではないかという指摘ですが、現在、子ども子育てプランの変更を行っておりまして、児童の利用実態を調査しております。本当に現状として、減っているのかどうかということも含めて、今調査しているところで、またその結果も報告できると思ひます。
中村委員	個人的なことですが、私は、東山泉学区でして、合併したことで、学区外の月輪、一橋からも、結構人が来られます。先日もクリスマスイベントがあったのですが、これまでより人が来ているようでした。来館者も結構来ているイメージでしたので。非常に細かい限られたエリアしか見えていないのですが、盛り上がっているようにも思ひましたので、来館者数が下がっているのはちょっと残念かなと思ひます。

事務局 仲筋課長	児童館の登録者数は増えているのですが、自由来館児童が逆に減っているのではないかと思います。逆に言いますと、登録者数は増えているので、児童館のそのものの利用は増えているという実態もあり、児童館の使われ方が過渡期にあるのではないかと思います。本当に使われやすい児童館というのを今後検討することとなります。
木村委員	重ねて良いでしょうか。児童館の来館者数について、今、客観指標が「児童館の利用児童数」や「学童クラブ事業の登録児童数」になっていますが、この指標というのは、新たな実態調査に基づいてまた検討されるのでしょうか。
事務局 仲筋課長	そうです。次の子育てプラン、分野別計画が策定されることになっております。他の指標につきましても、実施計画を作ったり、分野別計画を改訂したりして、計画の目標値が変わるということに合わせて、これまでも客観指標を変えてきております。子育てプランが出来きたとなりますと、児童館の使い方が変わってまいりますので、政策の達成度に表すのにふさわしい別の指標が掲げられるということになりましたら、指標を変えていく事があるかと思います。今後の分野別計画の検討次第になります。
赤川委員	通常登録されている児童の方が通われているという認識で、自由に遊びに行ける人とは、どのようにカウントしているのですか。遊びに来ている人数は実際カウントできているのでしょうか。
中村委員	名簿があって、日常的にカウントしていると思いますが。
赤川委員	行っている時に名簿を書かされてはいます。ただ書かない児童もいると思いますが。
事務局 仲筋課長	一応概数で客観指標として設定されているというよりは、ある程度児童館の集計したものが出ていると思います。例えば、ふらっと来て名簿を書かない児童が集計にもれているかなどまでは分かりません。
赤川委員	しっかりとれていないものを資料に挙げてしまって、評価が下がるということはちょっと悲しいかなと思います。
事務局 仲筋課長	捕捉できない可能性が単年度のものなのか、もしくは指標そのものに付随する現象なのかによって判断は分かります。毎年指標のとり方が同じであれば問題ないと考えます。指標としてきっちり捉えられていますかとい

	う御意見につきましては、この指標を所管している所属に伝えますし、一回調べさせてもらえればと思います。
窪田委員長	おさらいして３点目は、河川の改修箇所は京都市がやっているものなのか、府や国を含めて全部なのかという御質問だったと思いますが。
事務局 仲筋課長	この指標で管理しているのは、市が管理している都市整備河川ということで把握している数値ですので、京都市の管理している河川ということになります。国の管理河川は除いております。
中村委員	京都市が管理すべきところをしっかりとやられている訳ですね。
事務局 結城部長	国や府の管理河川につきましても、京都市政は市民生活の一番身近なところですので、危ない所は連携してやってくださいということも、市政としてやっております。市内にある河川のほとんどは市管理です。桂川など国・府が管理する大きい河川は目立ちますが、小さい河川が多く、ほとんど市が管理しております。 市内の河川は、全部で３８０河川あり、うち国が直轄しているのが５河川です。京都府が管理しているのは５３河川ですが、その内一部は京都市が管理受託のような形で１８河川ありますので、府の管理は３５河川となります。残りの３４０河川が京都市で管理となっております。
佐野委員	児童館のお話で、実数でカウントした方がいいのか、比率でカウントした方がいいのかについて、短期的には実数で良いと思いますが、長期的に見れば比率の方がいいものもあると思います。例えば、高齢者の何割の人が使っているとか、子どものうちの何%が使っているみたいなものです。数として京都市の児童数などあると思うので、それに対して何%となり、単年のには意味ないかもしれませんが、１０年、２０年のスパンで比較すると、もしかしたら比率でみた方が実態に合うかもしれない。ものによると思います。 もう一つが、サービスを供給している量が目標値になっているケースと、利用実態、サービスを実際利用した人の数が目標値になっているケースと両方があります。本来望ましいのは、利用実態を目標値にすることですから、サービスの供給量を目標値にしていいいのかという気が少しします。ただし、ものによっては利用実態を調べることは難しいこともあると思うので、全てをそのようにすることは難しいのですが、例えば、自転車について、実際どれほどその自転車が停まっているかという方がいいのではないのでしょうか。その整備箇所だけではなくて、本当にどれくらいの数

事務局 仲筋課長	の自転車が停まっているかということを見た方がいいかもしれない。それをいちいちカウントすることは大変なので、整備箇所でもいいかもしれないですが。 ただし、ファミリーサポートでしたら、登録者数ではなくて、実際にそれを使っている人の数をみた方が、実態がわかるのではないかという気がします。望ましいのは、どれくらいの人がどの程度使っているのかという数で把握することで、どうしても難しい場合は、サービスの供給量で把握することになると思います。可能であれば、利用実態の数字を使うことについて、今後の課題として考えていただけたらと思います。 もう一つ最後に、川の話で国や府とありました。難しい話ではありますが、市民からすると関係のない話で、鴨川も使います。文化施設の利用者数を見たときに、二条城や無鄰菴等、京都市の管轄している文化施設の利用者数が出てくるのですが、国立博物館とか国立近代美術館とか、国立の美術館などもあって、もちろんそこを利用する人もいます。でも国の施設なので、植物園も府の植物園なのでということになりますが、国や府の施設利用者を含めるのか否か、どっちがいいのでしょうか。京都市の政策・施策を考えると、国や府の文化施設をカウントしても仕方が無いですし、実際京都市民が文化的なものに触れていることを知りたいのであれば、国や府の施設の利用者数をカウントしてもいいかもしれない。両面があると思うのですが、ものによっては、国や府の部分も含めて数字を入れたほうがいいものもあるかもしれないと少し思いました。これも今後の参考になればと思います。 これから人口減少の時代に入っていく中で、これまでサービスをどんどん増やしていく時代からの過渡期になっております。そういうことも含め、ただ闇雲にサービスを増やしていくのがいいのか、ということも含めて検討する必要があるのかなと思いますし、今後検討していきたいと思います。 また、市のみの単独で見るのか、他も含めてみるのかということについては、まさにどのような政策、施策、目的、目標にしていくのかということと関連すると思いますし、基本計画自体が市民もしくはいろんなステークホルダーと一緒にやりながら達成していく事になりますので、政策分野・施策分野ごとになるかと思いますが、他の主体の数値を加えて考えた方がより適切なのかどうかということで指標を考えていく必要があります。 もう一つ捕捉できる指標なのか、もしくはそれを捕捉するのにものすごくコストがかかるのか。そういうことと比較しながら、考えていきたいと思っています。
---------------------	--

事務局	児童館については、自由に児童が行き来が出来る自由来館と、学童クラブという二つ大きな役割を持っています。この指標の結果の基準説明の部分で過去最高・過去最低と書かせてもらっていますが、傾向として、学童クラブの利用数が今非常に伸びておりまして、平成20年度に8,000名程度であったのが、30年度には1万4,000人程度と増えています。共働きの方が増えているため、増加していると原因分析をまとめています。 自由来館については、利用者数が過去最低となっており、29年度は59万人という数字ですが、26年度に66万人と過去最高となっておりまして、利用児童のカウントが全て出来ているかというところでできていないかもしれないですけど、大きな数字として減少傾向にあります。こういう実態を踏まえまして、先程、仲筋から御説明申し上げましたとおり、平成31年度に次の子育て関係の新しい計画を作るということで、今年度実態調査を踏まえまして、少し変えさせていただければと思います。 サービス供給量を指標としている件については、民間の駐輪場がどの程度稼働されていて、何台停まっているかは京都市では捕捉出来ないため、実際には整備台数という形にさせていただいております。なお、福祉系の計画は法定計画として、国の法律に基づいて計画をたてており、最低供給量を目標値として出していないといけないものもあります。計画を国の決まりによって作っておりますので、どうしてもサービス供給量で提示するようなものも出てくるということになります。
風間副委員長	「市内各地における個性豊かで魅力的なまちづくり」について、ものすごく重要だと思いますが、指標の「地区計画・建築協定及び景観協定の締結数」が、去年から今年で1件増となっています。つまりこれが1件増えたか減ったかで魅力的なまちづくりを評価することになります。次の「まちづくりを支えるしくみづくり」も同じ指標を使っていますが、まちづくり関係については、色んな見方、指標があると思います。協定は大事だと思いますが、これだけではちょっとどうかと思います。多分もっといろいろな努力をされているのではないかと思います、実態が見えない。
事務局 仲筋課長	確かに地区計画は、そこに行きつくまでに10年ぐらいかかることもあります。地区計画の策定までには、もちろん地域において、話し合いをして、説明会をしてというように、多大な労力をかけているという現状があり、最終的なゴールとして、一番見やすいのは地区計画であるため、間違いない指標として設定しているということはあります。そこに行きつくまでの努力であるとか、プロセスであるとか、指標として取れるのか、反映できるものがあるのだろうか、そういうことも含めて、考えていく必要が

	あります。
風間副委員長	「まちづくりを支えるしくみづくり」の方の「景観・まちづくりに関する相談件数」の指標もちょっとずれているかなという気がします。まちづくりの実態を知っているだけに、もっといろんなことがあるのかなと。
事務局 仲筋課長	確かに景観まちづくりセンター等においても、まちづくりを支える人を養成していますので、そういう数値がとれるのかどうかも含めて考えてまいります。
風間副委員長	他のもそうですが、隅から隅まで読んでいる人はいないかもしれませんが、行政の現場の実態というのを、読む人が読めば、ああこういうことなのだとわかるような事項が結構あった方が読んでいて楽しいのかなと思います。先程のサービスの利用実態の話もそうですが、結局そこだと思います。
西島委員	指標がたくさん並んでいると、市民としてどこにポイントを持って見ればよいのが難しい。京都市として、今年度どこに注力していくかなどは、別の何かに記載されているのでしょうか。
事務局 仲筋課長	確かにこれだけ並んでいると、市民の方には難しいものになります。この中で特にこの指標ということについては、先程の資料3の説明の中でいくつかの指標と評価結果をお示ししております。指標のそれぞれを市民の皆様に説明しますと、先程申しあげましたとおり、「カビ臭から見たおいしい水」等非常にテクニカルで分かりにくい指標もあります。 そしてもうひとつが政策評価で、aであるとか、bであるとかということ、指標に代えて市民の皆様に御伝えしております。なぜ変わったかというところについては、指標に付随した説明を評価結果に記載させていただいて、特に文化や観光等、京都市が今力を入れていることをお伝えしております。また、付随してわかりやすい解説もホームページで紹介をする等、なるべく分かりやすくなるようにしております。すべての指標についても、皆さんに見ていただけるようにはなってはいますが、全ては見られていないのかなと思います。
西島委員	政策評価に関わらない人たちが、京都市がここに注力していくということ、ホームページ等で見られるということでしょうか。

事務局 仲筋課長	そうです。評価結果の特にここの所が重要ということは見られます。
西島委員	では、ホームページにアクセスすれば見られるということですね。
事務局 仲筋課長	そうです。
事務局	補足ですが、区役所等でも閲覧できるようにしております。情報公開コーナーにも置いております。
窪田委員長	理想的には、施策評価と政策評価の指標を見れば、この文章で書かれている施策と政策の願いが実現しているかどうか、普通の市民に分かれればよいですね。多くの市民の方も含めて、アクセスすれば評価制度の構成や指標などがわかるという趣旨で制度を運営しておりますが、見方がわかるまでのハードルが高いのかなと思います。 私も2～3点申し上げたいのですが、まず、自転車の事が話題になっており、指標も変えられたとのことで、必要に応じてより良い指標にされるのは良いと思いますが、自転車の利用が社会的にも進んでいるのだろうと思います。細かい数値は持ち合わせていないのですが、駐輪場によって、また時間帯によって、満車になっている所があります。京都市のことではないのですが、私の地元大阪のＪＲ沿いでは、駐輪場がいっぱいで停められないというようなことが何回か起きています。市内でもそういうことがあり、朝の通勤通学の時間には結構置けず、その辺に置いておくしかないということになると、それは違法駐輪になる。市民生活実感としては、停めたい時に自転車をどこに乗っていても停められるということが大事ななと思いますし、そういう着眼もいいのかなと思います。 次に、資料３の１６ページの政策重要度と市民生活実感のマトリックスを載せてもらっていますが、市民のアンケートの回答で政策重要度と市民生活実感がどうなのかという課題について、今回、下がってきているのが気になる点です。いつもはちょっとでも上がっていますが、全部落ちているのは見栄えが悪いです。このあたりについて、分析等はあるのでしょうか。全部重要度が下がっており、前年度に比べてという点では、少し気になります。 あともう一つは、一つ一つの指標の変更について御報告いただいて、理由も御説明いただいているのは良いのですが、この委員会でも指摘はさせてもらっているような、指標の変更、よりよい指標を求めてというのは、一般的には、どういうきっかけでしていただいているのでしょうか。自主

事務局 仲筋課長	的によりよい指標を考えて、直していただきたいと思いますが、活発にや っていただいていると思いますが、次回への参考にもなるだろうし、どう いうきっかけでされているのか、把握されている範囲で結構ですので、教 えていただけたらと思います。 マトリックスについて、正直、こういう要因でという所について科学的 な分析はできておりません。一方で、市民生活実感の回収率が下がってい るということもありますので、主観的な見方になるかもしれませんが、マ トリックスの結果と市民生活実感の回収率の関係性がもしかしたらある のかなと思います。ただ、客観的に分析してはいないというのが現状です。 次に、指標の変更のきっかけについて、一番多いのは、分野別の計画の 変更が多いかと思います。京都市では指標を掲げて、それに基づいて目標 を設定し、それを把握しており、分野別計画の指標が変わった際に変更が 生じます。また、今日もいくつか申し上げましたけども、目標を達成した 場合です。達成後そのままにされる傾向があった場合、我々事務局の方で も各担当課に「もう達成したので変えましょうか」というように促してい ます。一番多いのが分野別計画で、次に、目標が達成された場合が多いか と思います。レアケースですが、上下水道局のように山間地域が統合され たとか、個別の事業によっても指標が変わったということがあれば、各担 当課から、変わりましたと報告をいただいております、指標がどう変わるかは、 確認できているかと思います。
窪田委員長	毎年、指標の選択、目標の選択について、適切であるかチェックするよ う要請はされているのでしょうか。
事務局 仲筋課長	それはしています。私どもは計画部門ですので、各種の計画がどんなふ うに変わっているか、情報が入ってきますので、それとも照らし合わせな がらチェックしています。
窪田委員長	ありがとうございます。
赤川委員	回収率の問題ですが、なかなか回収率が上がらない点についてはどうお 考えなののでしょうか。
事務局 仲筋課長	それは次の議題となっておりますので、後ほど説明させていただきます。

佐野委員	目標をクリアした時の止め方をどうするかという問題ですが、例えば、無限に増えた方が良いか、無限に減った方が良いかのことがあります。交通事故であれば、減れば減るほど良いが、駐輪場とかは段々必要性は薄くなっていくと思います。おそらく優先度が高い所から整備されていて、段々そういうところから次第におさまっていったら、今はそれほど優先度が高くなっているのだろうと思う。今、京大の近くの百万遍でちょうど駐輪場の工事が大体終わったところで、あの辺も確かにあった方がいいが、大変困るというわけではない。一方、同志社のあたりは絶対ないと困ります。 次第に大事な所から埋まっていった際、単純に目標値を今までどおりの延長線上で作ってしまうと、確かにあった方が良くても、そこまでコストをかけて作るほどかということにどんどん作っていくことになる。リスクもあるので、目標値そのものを京都市の実態、自転車の状況を見つつ、また、現場の方はよく御存知かと思いますので、そのあたりを考えつつ、どこまで増やすのか、無限に作るのかということかと思っています。むしろ、この辺に自転車を停められないことがあるとか、数を増やすよりも、なかなか作りにくいけどこの辺の街中に作って欲しいといったことがあると思います。 単純に数だけではなくて、安い土地で安く作りやすい場所にたくさん作るのではなく、大事な所にちょっとでも増やしてほしい。そこを少しでも考えていただければと思います。それを目標値として上手く数値化できるかどうかは難しいですが。
窪田委員長	必要性の問題ですよね。事務事業評価ですと、事業実施で必要性が満たされたら止めることになるのですが、施策や政策は総合計画で書かれている以上、なかなかその必要性を再考して止める、見直すとはなりにくい。そういう配慮も必要だという御指摘であろうと思います。
事務局 仲筋課長	目標を達成したということで、担当課レベルで恣意的に目標値を変えとか、そのままの延長にしておくというのは、市民実感とかけ離れることになります。特に自転車に関していいますと、京都市の自転車の審議会でかなり細かく審議しておりますし、先程口頭で申しましたような分野別計画の変更とか、もしくは審議会でも議論している、専門的な見地で議論しているということを踏まえて、指標を変えていくというのが前提になると思います。 達成したから次は10件ぐらい増やしておこうかという設定は無いように我々がチェックしていますので、現状に合わせて、なるべく専門的な議論を踏まえて、もしくは分野別の審議会を踏まえて変更するよう、我々

	としても各担当課にお願いしております。
窪田委員長	もっともですが、各部門の審議会の専門性が高いと思いますが、一方で本委員会には、政策評価、施策評価の総合調整機能もあると思いますので、なかなか難しいけれども、出来る限りチェックを頑張りたいと思います。折角全体を見ているので、一定の総合調整機能も期待したい所であるということです。 では、続きまして議題の3つ目の政策評価制度の改善の検討状況です。特に改善については、昨年の委員会の方で提案して、頑張って実行していただきましたインターネットの活用及び新しい設問追加の結果、また回収率が下がったというような問題について説明をいただき、御意見いただきたいと思います。
事務局 仲筋課長	－事務局より議題3「政策評価制度の改善の検討状況」（資料4，5）について説明－
窪田委員長	ありがとうございました。複数の点に渡っている訳ですが、一番今回課題として重視されているのが、有効回答数が過去最低になってしまったということです。資料5の一番下に書かれているような案を出しておられますが、これについてみなさんから意見をいただきたいということです。 昨年度御意見をいただいて取り組んだ2つの新しい取組の評価についても伺いたいとのことです。いかがでしょうか。
風間副委員長	市政総合アンケートを見ますと、回収率がだいたい39%となっていますね。
事務局	市政総合アンケートは毎年テーマを変えますので、テーマによってばらつきがあります。だいたい4割程度、低いものだと30%となっていますが、概ね4割程度となっています。
風間副委員長	去年は2回ともだいたい4割程度でしたね。
事務局	そうですね。少し前までいきますと「京都の伝統産業」というテーマでいくと3割程度。市民の方から見て関心を持っていただけるかどうかで回収率が大きく変わるところはあります。
風間副委員長	今のお話でいくと生活実感調査という名目そのものが関心を持っていないのかなという気がします。

木村委員	このアンケートはどのような形で郵送されているのですか。
事務局	封筒の中に入っておりますのが、この調査票と返送用の封筒、そしてアンケート調査結果を送付して欲しいという方のために、送付希望のハガキを入れています。この３点を封筒に入れて郵送しています。
木村委員	調査結果の送付希望は結構あるのですか。
事務局	１２０件程あります。
木村委員	ぱっと見た時に漢字が１０文字「京都市市民生活実感調査」とあり、私がおばあちゃんなら難しそうだなと思います。 この表紙を変えたら、指標として正しくなるのでしょうか。アンケート回収率を上げることをテーマに意見を出せばいいなら、京都市民としての意見はたくさんあるのですが、それでいいですか。
風間副委員長	表紙がわかりにくい。
木村委員	難しそうだなという印象を受けるかなと。市長の顔を写真で入れるなどしてはどうでしょうか。
窪田委員長	かなり以前に、そもそも市長のサインを入れて、重みを持たしてということをしたわけですね。こちらでは効果があったということになっています。ちなみに、舞鶴市で評価制度のコーディネーターをしているのですが、無作為抽出した人にアンケートして、「なぜ来るのですか」、「なぜ来ないのですか」という質問をすると、「市長の名前で依頼があったので、非常にびっくりする」という回答でした。舞鶴市と京都市は違うので、門川市長に依頼されたら来るという方がいるかもしれない。評価会に来るのとアンケートを答えるのは違うわけですが、写真があれば親しみがわくかもしれないですね。
中村委員	別紙で案内状を付けるようなことも、いきなりポンと来たりするよりはいいのではないのでしょうか。
風間副委員長	どんな風に使われるのかを記載したり、「ぜひお答えください」といった文言なども入れてもよいのでは。

事務局 仲筋課長	実は調査票を統合する前は、御案内を一枚つけていましたが、印刷費の関係で今回統合してしまったということです。それによって４ページ増えました。
窪田委員長	こういう時に、最近のはやりに沿って概ね１０分程度で回答できるアンケートという文言を加えたのでしたね。前は無かったですよね。これが何分でできるのか、ここでもやってみて、概ね１０分という答えを出したような気がします。
事務局 仲筋課長	実は初期の段階から、政策評価委員会において、回収率をいかに向上させるかというのは、かなり継続的に御議論いただいております。
窪田委員長	それでは皆様、自由に御議論いただいたと思うのですが、緻密な調査はできないものの、事務局としてお持ちの「枚数が多いと回収率が下がる」という仮説について、何か御意見をまとめて頂戴できないかと思ひますが。
中村委員	とても面白い分析だと思います。ページ数が多いと回収率が悪くなるというのは、ぜひ調べてほしいと思います。追加の質問というのは、「京の花」に関するものですか。
事務局 仲筋課長	そうです。
窪田委員長	追加の質問が一枚そのまま調査票に掲載されたと思っていただけたらと思います。調べるというのは、一回やってみて調べるということしか方法はないと思いますが。
中村委員	固くいくのであれば、「京の花」よりは、本文の中にありますように、「花き産業振興のためのアンケート」であれば、アンケート全体としてのバランスがあったのかなと思います。よく京の〇〇と言いますが、京の花というと、僕は実態がわからない。ちょっとまとまりがなかったのではないかと思います。それと回収率は関係ないと思いますが、ちょっとバランスとして違和感を覚えたということです。
風間副委員長	要は受け取って見た時に、面倒くさいなと思うかどうかかですよね。開いてどうかという話では無い気がしてまして、最初送られてきた時に、横に置くか、見てみようかな、見てから答えてみようかなと思うかどうかという感じではないかと思ひます。市民のことは良くわからないですが、

	そういうことなのかなと。とにかく、表紙は大事かなと思っておりまして、開いてもらって、開いたところがこれも重い感じがしますよね。面倒くさいなと思ってしまいます。
赤川委員	多分これであれば、1枚目はやってみようかなと思いますが、めくって1ページ目ぐらいで、次第に字が多い気がします。年代によって違うとは思いますが、しんどい、読みづらいなという体裁になっていると思います。
風間副委員長	読んで理解してチェックを付けるので、実は真面目な人だと、ひとつひとつ真剣に考えないといけなくなり、これはこれでまた負担がかかるのではと思います。
事務局 仲筋課長	統計をとった訳ではないですが、お問合せも結構いただいております。高齡の方から、少しボリュームが多いとか、どう答えていいのかわからないという御指摘もあります。風間先生もおっしゃったようにボリュームが多いと受け取られている方は正直いらっしゃいます。
窪田委員長	続いて、インターネットを活用した調査について、実態等分析をされておりますが、いかがでしょうか。
木村委員	インターネットの回答については、初めて取り組まれたということですが、事務作業が大変だったと思います。せっかくやるなら、今後もっとインターネット回答が増えていくような仕組みがあった方がいいと思っていて、私はこれを見た時に、インターネット回答の説明が最後のページなのですが、表紙にQRコードがあった方がいいのではないかと思います。
風間副委員長	QRコードがあれば、インターネットで回答できることがわかるので、説明は後ろの方でも良いのでは。
木村委員	若者の回答率を上げるには効果的かなと思います。
中村委員	ちなみに事務作業としては楽になったのですか。余計に大変になったのですか。
事務局 仲筋課長	正直事務作業としては、準備の事務量は増えています。郵送調査法でやると、回答する手段がインターネットというだけです。無作為抽出を前提にしますと、住所から無作為抽出をして標本を集めます。その標本宛に郵送して、インターネットで回答していただくという形にしないと、無作為抽出になりません。誰でも構わないのでインターネットで回答してく

	ださいというのは統計学的には有効にならないということになりますので、そうしますとこの郵送が前提になります。パスワードを送付物ひとつひとつに貼っていかねばならない作業が発生します。これを印刷にしたらいいのではとおっしゃるかもしれませんが、印刷にすると印刷費がかかります。 予算を抑えながら我々もやっておりますので、このシールを一枚一枚貼るという作業が発生します。ですので、作業的にはかなり大変だということになります。
木村委員	全部バラバラのパスワードを3, 000枚に貼るということですよ。
事務局 仲筋課長	全部バラバラにするかは、昨年度議論させていただいておまして、10から15ぐらいの単位でやったらどうでしょうかということで、それでやらせていただいております。ただ、いくつかランダムにはしておかないとということです。 回収にかかる入力の手間はさほど変わっておりません。ですので、あくまで回答される側の利便性の向上というところです。
窪田委員長	現行のシステムで実行できる範囲でまずは試行していただいたので、やり方というのは中期的、長期的には変わり得ると思いますが。佐野委員はいかがでしょうか。
佐野委員	調査票は薄い方がいい。うちにもこのアンケートではないものが、京都市から来ましたが、単純にこのように見た時の感じは大事だなと思います。あと、極力字を減らすということ。普通の人にはこれを全部読めないのではないのでしょうか。そもそも若い人は新聞を読まないし、こういう字を読むということ自体が、苦痛というかナチュラルではない。どうしても入れないといけないのであれば、もう少しメリハリをつける方が良いと思います。大きな字でぱっと見た瞬間にわかるものと、わざわざ読みたい人が小さい字だけ一生懸命読むかというもので、もっと字の大きさのメリハリをつけて、直観的に○をつけて返せばいいということだけがわかって、あと他のところは見たい人だけ見てねと、それでほぼ大丈夫ではないでしょうか。
窪田委員長	外国人市民にとっては、なかなかハードルが高いものにはなっているでしょうね。
佐野委員	アンケート項目の白黒は列がわかるようにということだと思いますが、意外と見た瞬間に重い感じがします。

窪田委員長	ぜひ閣下に御意見をいただきたいのですが、同時にまとめて実験するとどれが効いたのかということがわかるのですが、実行しながら見ていかなければいけないということもあります。
事務局 仲筋課長	佐野先生がおっしゃったように、直観的ということが非常に大事なかなと思っております、今回インターネットを入れたことによって、インターネットで回答するのか、紙で回答するのかを文章を読んで判断するというワンクッションが入ることによって、30代、40代の方は、文章を読んで咀嚼して回答を判断することができたのかもしれないのですが、この調査については高齢者の方の回答も多いので、ここで直観でひっかかって、回答されなくなっている可能性も否定しきれないなということもあります。
佐野委員	割合ですので、回答者数としてどうなのかということはありませんが、意外と60代が少ない。このようなアンケートについては、60代の方が一生懸命回答するはずで、確かに今言われているようなところが出ているかなと思います。
窪田委員長	次の点ですが、設問を追加したことについては、重くなってしまったと思います。1点だけ申し上げておきますと、資料4の2の(1)に書かれている文章の解釈が私と事務局では違ったのかなと思います。京都市の各部局の政策評価への関心を高めるということ、全庁的な関心を高めるまでには至らなかったという総括をいただいておりますが、実はさすがにそこまでは意図していなくて、京の花に関わる部局は我が事として捉えて、関心が高まるのだけでも、それ以外の部局の関心が高まることは意図していなかったわけですね。 実用重視評価というものを、我が国でも自治体でも事実上初めて試すというのですが、評価のデザインに関わった人たちが、我が事だと捉えて生かすという話であって、さすがに全庁的な関心は高まらないだろうということで、そこは想定どおりであろうと思います。そういう意味では担当部署において関心が高まったことについては、意味あることであつたと思いつながらも、重くなってしまい、ちょっと試行したけれども一度止めたというの、仕方ないかなと思っています。そちらの点について、いかがでしょうか。 実際には、調整しながら限られた設問数で、どうやったら政策立案に使ってもらえるか。御紹介いただいたアンケートとは違う話であって、ごく限られた制約の中で設問を入れて欲しいということで、今後また再開する際には、うまく育てていただきたいなと思います。ただ、試行ということ

	で大変御苦勞もおかけしたと思っています。
中村委員	もし入れるとすると、追加になるのであれば、場所を間違えていたのではないのでしょうか。花のアンケートの後に、市政関心度へ戻ることになるので、すべてのアンケートが終わった後に、京の花に関するアンケートが最後にあるとよかったのではないかと思います。 また、調査票Bと書かれていますが、これはどういう意味ですか。
事務局 仲筋課長	設問数が多いので、1, 500と1, 500で半分ずつにAとBに分けておまして、これは回答者には関係ないのですけども、入力作業の時や封入作業の時に間違いが無いように、そういう趣旨で入れさせていただいております。
窪田委員長	その辺の総括と次年度に向けての対策等について、あらためて御意見を伺っていきたいと思います。まずは、回収率を上げないといけないという課題があります。方法として案を挙げていただいていることや、来年度はこうするということですけども、再来年度以降の中期的な展望のようなことで御意見いただけたらと思います。いつか全面的にインターネットにしましょう、このまま紙で違う方向に高めていきましょうなどあると思いますが。
中村委員	先程の評価が下がったということと関連して、インターネットの回答が下がる傾向はないのでしょうか。
風間副委員長	インターネットの回答と紙の回答の評価の差についてということですか。
中村委員	もちろんインターネットの回答の母数が小さいので、非常にとりにくいと思いますが。
木村委員	郵送とインターネットで回答の評価が変わるかということでしょうか。
事務局 仲筋課長	それについては分析できておりません。
赤川委員	インターネット回答で無効票が出てしまうことは勿体ないですね。
事務局	ネット調査の過渡期であると思っております、基本的に学術的には、

仲筋課長	郵送調査票をやるべしということになっておりますけれども、今後仮に例えば位置情報やインターネットのアドレスが標本と紐付くような時代になるとも限らないですし、そうなれば調査のやり方自体が根底から変わる可能性があります。そういう時代になれば、インターネットが学術調査の主流になる時代が来るかもしれませんが、現状ではこの方法しかないのかなと思います。 市役所庁内でも、調査のやり方の議論が方々で始まっており、京都市においてもネット調査のプラットフォームができるかもしれませんので、そういう動きを見ながら、今後市民生活実感調査も進めていかないといけないと思います。 もう一つ、10年計画である基本計画に関する評価があと2年となっております。評価の連続性という観点でいきますと、調査方法を根底から変えることは良くないのではないかと思います。ある程度有効な調査を10年間続けたいといけません。その後、もしかしたら市民生活実感調査のあり方やアンケートのあり方というものを変えるということも、次のステップとして考えております。平成19年度に改善を図り、回収率を回復させた実績があるので、あと1、2年程度は様子を見させていただいて、設問の追加やインターネット調査の結果を踏まえて、次のあり方を考えていかないといけません。今、過渡期の状況であることを前提に考えていただければと思います。
窪田委員長	まもなく次の総合計画が始まるのでしょうし、そこに向けて来年度は数字を回復して評価制度もやっていくという話に現実的にはしたいと思いますし、信頼度が下がってくるというのは苦しいという事情もあるかと思っています。 インターネットはせっかく試行していただいたので、一旦休止して様子を見て、設問の追加、実用重視評価なども余力が出たら頑張りたい。次年度の評価に向けてということですが、概ねよろしいでしょうか。
木村委員	冒頭おっしゃった働き方改革の事務タスクの減少について、何も議論できていないなと思うのですが。
事務局 仲筋課長	それは次の議事をお願いしたいと思っております。
風間副委員長	調査票の表紙で市長の言葉で書いているのは止めて、調査の目的をパッと書いた方がよいような気がします。丁寧なのですが、シンプルに書いた方がよいのではないのでしょうか。市長が何か言っているという感じに読め

	るので。印象ですので、やってみないとわからないですが。
事務局 仲筋課長	一方で、高齢者の方であれば、これが本当に京都市の調査なのかという懸念を持たれる方がおられます。市長名が入っているので、京都市の調査であるなどと思われる方もいらっしゃると思いますことから、この文面がいいのか、このボリュームがいいのか、信用性を担保するためにはどうしたらいいのか、比較しながら考えたいと思います。
風間副委員長	表紙の言葉は市長が言っている言葉ではないですね。中身を見ると「市内にお住まいの方から無作為に選んだ・・・」等ありますが、市長が言うはずはないと思います。市長は「お願いします」との呼掛けという感じで、目的が何かは別に書いた方がいいのではないのでしょうか。
窪田委員長	ありがとうございました。 それでは次の議事に移りたいと思います。京都市の政策評価制度においては、市民意見を随時受け付けておりまして、最近御意見いただけておりませんが、その回収の状況をお願いいたします。
事務局 仲筋課長	－事務局より議題４「市民意見の受付状況」（資料６）について説明－
窪田委員長	この点について、御意見がございましたらお願いします。以前は評価制度の運用についての御意見が多かったのですが、こういう制度を設けておくこと自体が非常に大切だということです。 それでは、議題５「その他」ということですが、先ほど事務局の方からお話いただけることがあるとのことですので、お願いします。
事務局 仲筋課長	木村委員からも御指摘いただいておりますが、政策評価制度につきまして、制度の改善を加えてきまして、我々としましてもかなり完成度の高い制度になってきたと考えております。本委員会においても、おっしゃっていただいたような働き方改革、コスト面についても御留意いただけてきました。 一方で、全国的に働き方改革が進んでおり、京都市におきましても、事務作業を見直そうという話もございます。職員数の削減、予算の削減もある中、効率的な事務作業を進めていく必要があります。政策評価制度につきましては、２７政策分野を対象としておりますので、評価実施にあたりましては、冒頭資料１で御説明しましたとおり、総合企画局だけでなく、各局に照会して回答してもらうという形で全庁的に事務が発生しており

	ますので、制度の効率化ということも考えていけないといけないという状況にあります。 政策評価手法につきましては、高い精度で指標の掲げ方や評価の仕方が確立されておりますので、これまでの評価のあり方や評価の連続性などからすると、現時点で評価制度を抜本的に変えるというのは難しいと考えております。 一方で、評価の対象である京都市基本計画が平成32年度で終期を迎えますので、来年度以降、本委員会におきまして、働き方改革、職員の減少ということも踏まえまして、例えば、京都市の中において言いますと分厚いマニュアルを使った照会を止めましょうということも含めて働き方改革のマニュアルが作られており、まさに政策評価制度も対象となりますので、より効率的な評価制度のあり方につきまして、今回の委員会も含め、今後御留意いただき、御意見をいただければと思います。 また、冒頭委員長からもございましたが、本委員会も任期2年ということで、一旦任期が終わるわけですが、それも含めまして今の観点に基づきまして、御意見をいただけたらと思います。
窪田委員長	今お話いただいたことも含め、私も冒頭申し上げましたとおり、2年の任期も終わるということでございますので、最後に皆様から一言ずついただけないかと思います。
木村委員	私も大学で働いていて、働き方改革等より良い仕事をしていきたいと思いつつ、例年やってきたことプラスアルファをやりたいと思うものの、なかなか限られた労働時間であるので、難しいと思いながら聞いていました。この評価制度については、より良い過程を踏んでいただいていると思っていますので、私も年に数回この委員会に寄せていただき、京都市のことを外から見るといい機会をいただいたので、ありがたいと思っています。
西島委員	アンケートに戻ってよろしいでしょうか。アンケートの最後に「あなた御自身のことについてお尋ねします」という項目がありますが、パッと答えやすい内容であるので、最初に持ってきた方が良いのではないのでしょうか。だんだん考えないといけない項目になっていった方が良いと思います。質問に書かれている日本語が難しく「歩いてこそ魅力を満喫できるまちとなっている」は、「地下鉄、市バスは使いやすい」等ストレートに聞いた方がいいのではと思います。 この委員会に出席させていただいていることはすごくいいことだと思っています。まちづくりは市民からやるものだと思っており、アンケートを受け取った人が、これを回答することで、市役所の方々とやり取りがあ

中村委員	って、こんな風に意見が反映される、公表されるということが少しでもあると、京都市に意見を言って市政に参加しようという気持ちになります。 もっとそういうやりとりが増えると、もっといいものとして相当実感もされていくのではないかと思います。 いろいろ勉強になりました。特に今回、調査に関して、インターネットも試行していただきまして、委員の方から出した意見も取り入れていただきました。またその結果を受けて、今後どうしようかということで、やったことに対して実際にこうやって議論させていただけたということは、委員として参加させていただいて、一番良かったことかなと思います。 細かいことを言い出すといろいろなことがあります、アンケートをどう良くしていくのかということについて、去年のうちから議論できたことが良かったかと思います。 あと、分厚い冊子についてですが、各部署において、今後の方向性というものをとても細かく、しっかり書かれており、こういうところが重要なかなと思いますので、市民にどんどん提示していただくといいと思います。
赤川委員	資料が非常に多い委員会であるという印象であり、最初は見方もわからないところからということでした。他の京都市の委員会とは違い、委員長をはじめ、アットホームな感じで進めていただき、興味が今までなかったことに対しても、非常に興味を持ち考える機会となりました。何年か前は子育て世代でもあったため、子育てのことを質問していました。そうしているうちに、観光客が多くなり、自分の街に出ると人が多いということ等、今まで良かったことが、悪くなってきたのではということが、自分だけの印象かなと思っていたのが、このように数値化していただいて、外に発信いただくことによって、受け取る側が実際そうなんだと思う機会ができたことは、すばらしいことだと思います。今後もこのような形で進めていただければいいのではないかと思います。
佐野委員	私自身勉強になりましたし、こういう形で係わらせていただいたことは良かったと思います。働き方改革も含めての話でいいですと、全体量をどのように増やすかというのは大事ですが、その一方で大変な割にはあまり役に立っていないということになると、仕事されている方にもつらいし、全庁的にも、大変なことしている割には役に立っているのかと思われてしまうと思う。仮に労力がかかっている、あれはすごく役に立つものなのでやらないといけないと思ってもらえれば、やっている人たちにもやりがいもあると思うし、全庁的にも仕方がないということになると思

	います。 そういう意味では、こういうものが大変な割にはどういう形で役に立つというところがわかりづらい。個々の事務事業の評価のレベルだと割と評価も近いので見えやすいと思いますが、全体としてまとめて評価するとなるとどうしても、ふわっとした話となってしまうので、京都市役所の中では、何をしているのだろうということになります。色々数字を集めてAとかBとか評価されているけれども、何なのかということになりかねない。市民向けに大事さを伝えていくことは大事ですが、京都市役所の中で活用してもらえるかがやっぱり大事であり、これからの課題であると思います。委員会の仕事でもあるし、政策企画調整担当とも相談しながら考えていけばいいのではないかと思います。
風間副委員長	今日のテーマは回収率が下がってどうするのかという話でしたが、こういう話の時には市民感覚が大事であり、研究者の立場で見えてこない議論・テーマを委員会として設定していくことは大事ではないかと思います。特に生活実感調査の評価が下がったことを私は重く見ており、予兆のようなものがあって、ひょっとしてもものすごく下がった時に、生活実感調査の変化と施策の評価との乖離がこれから見えてきた時に、それを政策評価の体系の中でどのように結び付けるのかが結構重い課題かなと思います。 生活実感を上げる、下げるというのは、これは政策論のすごく難しいテーマだと前から感じています。これまでいい感じで安定してきたので、その時はいいなと思って見ていたのですが、観光客や災害などほぼ外的な要因かと思いますが、下がった時にそれをどうしたらいいのかを具体的に政策論に落とし込むのは難しい。その議論というのは、これからの委員会のテーマとなるのではと思います。
窪田委員長	平成20年7月から委員を務めさせていただいておまして、随分長くなりました。その間に様々な先生にも委員をやっていただいていた、同志社大学の新川先生もおられまして、アットホームな雰囲気たくさん議論する委員会であり、ありがとうございました。 当時は高校の先輩が委員にいて、今は大学の先輩が委員にいていますが、京都で育ったものとしましては、専門の政策評価を京都市の委員会で勉強させていただきましては、大変嬉しく思っております。 また平成26年から委員長にさせていただきまして、みなさんの活発な御意見をいただいて取り組んできたところですが、最後に歴代最低の回収率となりましたことは責任を感じております。

一方で、いいこともあり、客観指標の設定マニュアルを作られたり、全国的にも緻密なものと思いますし、指標を毎年自主的に改善されたり、きっちり委員会でチェックをしているといったことをしている自治体も多くは無いので、業績測定型の評価として未だに他都市と比較していいところに位置しているのではないかと思います。

また評価結果の示し方によって利用され方が変わることも当然の話ですが、過去からの経年の評価結果を示したり、学生アイデアも取り入れていただいて、マトリックスでの示し方を矢印付に変えていただいたり、様々な取組をしていただきました。

市民公募委員にも大変御活躍いただいている委員会ですが、事前研修もさせていただいたり、いろいろ提言を取り入れていただいているところで

一方で、私が委員長をしている期間に、諸事情あってやむを得ないとは思いますが、委員会の開催が2回から1回になってしまいました。こういうところで活発に御意見いただいても、もう一度練って次に活かすということがしにくいので、活発な御意見をいただきながらも、残念なところです。また京都市では事務事業評価や公共事業評価等、各種の評価が行われており、以前は評価制度間の連携ということをやっていたのですが、委員長同士の会議を含め、最近行われなくなっているなど、そういった点が最近残念であると思っています。

評価については、「評価疲れ」と言われていますが、一方で参加型の評価も出てきていまして、参加型評価の中にも、特定の施策をピックアップして調べるものも、参加型と実用重視評価を組み合わせで合体させたようなものもあちこちの自治体で試みられておりますし、無作為抽出された市民に関わっていただくことや、学生による評価など、私も複数の自治体の評価をやっておりますが、そうしたこともいろいろされていますので、今後も京都市の政策評価制度が、発展していくことを期待したいと思います。個人的には、10年近くさせていただきましたが、これから総合計画・評価制度を見直されるということで、関われないのは残念な気もしますが、市民意見は常に募集いただいておりますし、傍聴にきててもよいかと思っています。

委員の中には、継続される方もいらっしゃるかと思いますので、今回の議論を次に活かしていただけたらと思います。多様な委員に参加いただいているわけですが、引き続きこの委員会が、政策を評価しているというよりは、政策評価の制度をチェックしている趣旨からいたしますと、そしてその中で市民に対する無作為抽出の調査を大きな柱にしていることを考えますと、引き続き政策評価の専門家、統計やアンケートの専門家をぜひ加えて運用していただきたいと思いますと思う次第です。

事務局 仲筋課長	次の議事が「主な委員意見の確認」となっておりますので、それと合わせて事務局でお願いします。 長時間にわたりありがとうございました。簡単に意見をまとめたものを確認させていただきたいと思います。それを踏まえまして、主な委員意見を窪田委員長とやりとりさせていただきながら、平成30年度の意見としてまとめていきたいと考えております。 まず、政策評価結果及び政策評価の改善状況ということで、御意見いただきました。指標に関しても何点か御意見いただいておりますし、風間先生がおっしゃいましたまちづくりの指標の話や、実数値でいくのか割合でいくのかといった御意見をいただきました。また担当課と調整しながら、より適切な指標を設定していきたいと考えています。その点も含めまして、委員意見に盛り込んでいければと思います。 回収率の向上につきましては、事務局案で進めさせていただくということで、意見に入れていきたいと思います。見やすさ、回答しやすさについても、何点か意見をいただいておりますので、今後検討していきたいと思います。 最後に、この間の感想も含め、委員長からも御示唆もいただきましたので、そういった点も踏まえて、よりよい制度にしていきたいと思います。 また、委員の意見もまとめさせていただき、委員の皆様にも確認させていただきたいと思います。 それでは以上で、議事を終わりたいと思います。最後に、閉会にあたりまして、結城政策企画調整部長から、一言御挨拶を申し上げます。
事務局 結城部長	本日は、活発な率直な御意見をいただきまして誠にありがとうございました。今後、本日の議論を踏まえて、「政策評価制度に関する意見」等を取りまとめるとともに、来年度の政策評価の実施に向けた検討・準備を進めてまいります。 なお、本日御議論いただきました以外のことでも、御意見ございましたら、随時、事務局まで御連絡いただきたいと存じます。 それでは、これをもちまして閉会とさせていただきます。本日は長時間誠にありがとうございました。